

昨年九月の日中国交以来、はや一年となつてしまつている。降つて来たまゝな中国チームも、よまやく鎮まりつつあり、日中関係の緊要な発展が、さうに望まれるところである。

この一年間、日中間の交流が大いに擴大し、中国からは先に廖承志訪日団、今また、劉文輝経済使節団が訪れ、わが国からも最近の植村訪中団などをほしめ、

多くの代表団が訪中して、日中友好が大いにた

中国情報

中 嶋 嶺 雄

たえられてゐるのほまごころに同慶に耐えな

だが、このよまやかな交流が鳴り物入りで進んでゐるにもかかわらず、日中共同声明で約束された日中間の実務的な諸懸案については、復交一周年を迎えよつてしまつてゐる今日、いすれも実現の運びになつてゐないことが事実である。周恩来、田中会談で、まず最初に手がけるべき実務協定として合意したのは、日中航空協定締結には、またまた時間がかか

日中国交一周年の虚と実

りをつたし大筋では、すでに合意がなつたと発表された、通商貿易協定もまた鞏固には至つてゐない。漁業協定、海運協定なども、またこれから交渉しなければならぬ。わが国の中国報道のあり方を左右する日中記者交換の問題も、国交樹立以前とくらべて、原則的には何ら進展してゐない。

昨年の日中ブームの時期の新聞報道では、国交が樹立されれば、こうした実務諸協定はたゞちに締結され半年ぐらゐのうちに日中平和条約さえ結ばれる

実務協定、進展なし

であつた、とされてゐたのだから、以上の事実には、やはり注目せざるを得ない。

つまり、虚としての「日中友好」のハジメ身振りの割りにには、実としての日中関係の改善は意外に手聞じてゐるのである。こゝでその理由を、いろいろ数えあげることが容易だが、本質的にはアジアにおける宿命的な「異母兄弟」としての日中関係の困難さが指摘できよう。個別的には、たとえば航空協定の問題に見られるように、日中航路が開墾されたとしても、現状ではせいせい、多くて年

間二三人程度の往来だと予想されるのに年間約二十万人にものぼる日台交流を、さすべきがどうか、遅くないし二便のため日航、中華航空合わせて週八十便以上ものぼる航路を擁護すべきがどうかといふ問題のあることを、まず知らねばならぬ。

経済関係にしても、総額一千億円のぼる鉄鋼プラントの輸出商談がましまつたり、百万円の中国原油の輸入計画がましまつたりする大々的な報せはあつたが、たゞこれは百万円の石油はわが国の総需要二億六千万の二一であるし、当面のさすべきは案を伴つてのほかにいふ種がある。

半面、肥料輸出や生糸輸入などにみられるように、価格をめぐるとして、中国側の強気な態度も目立つており、春の広州交易会で示されたように中国製品全般の大暴落上げの問題もあり、最近日本貿易会がまごめたように、日本側にとって不利な取引上の難点も出はじめてゐる。こゝでた中で経済界の一部には台湾、韓国への「Uターン」現象も出はじめて、様々な波紋を投じてゐる。

国交一周年の今日、日中関係の善悪な進展のために、日中関係の虚と実を冷静に見極めて行かなければならぬ。(東京外大助教授)